

## 貧困指数（すぐに役立つ開発指標の話 第5回）、階層社会ブラジルでのフィールド・ワーク（フィールドワーク心得帖 第2回）

著者	野上 裕生, 近田 亮平
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) <a href="http://www.ide.go.jp">http://www.ide.go.jp</a>
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	176
ページ	48-51
発行年	2010-05
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2344/00004513">http://hdl.handle.net/2344/00004513</a>

# 貧困指標

Poverty Measurement

野上裕生

貧困を統計的に計測するのは意外に難しい。それは「貧困」にはいろいろな側面があるからである。まず貧困の深刻さを見るために食事や健康など、本人の困っている状況を調べる。そして、このような生活の苦しみの原因として、必要な生活費に所得がどのくらい足りないか（低所得）を調べる。しかし、「どんな人が貧困なのか」について社会の合意があるわけではない。従って貧困指標には「誰が貧困なのか」という「識別」と、「貧困層の様々な状況をどのように要約するか」という「集計」という作業がいつも問題になる。仮に貧困を低所得（消費）で定義するならば、人間らしい生活に必要な最低生計費（貧困線）を決める必要がある。そこで問題になるには「健康で文化的な最低限度の生活」の内容である。「最低限度の生活」の内

容をめぐって、生存に必要な経費（食費など）に注目する「絶対論的な立場」（Absolutist）と、社会の標準的な生活様式への参加を重視する「相対論的な立場」（Relativist）の論争がある。絶対論的な立場に従った指標は、開発協力で良く利用されている「一人一日ドル」（年間所得では三六五ドル程度。ただし購買力平価で評価）等が代表的である。

### ●貧困線の設定

最低所得の設定は絶対論的な立場に立つて生活必需品を市場で購入するのに必要な金額を基準にした「マーケット・バスケット方式」が採用された。しかし現実には「健康で文化的な最低限度の生活」の内容を恣意性なく決めるのは難しい。カロリーのないお茶やコーヒー等は食生活には欠かせないし、都市と農

村では生活様式も大きく異なるからである。それで多くの国ではマーケット・バスケット方式は放棄された。またエンゲル係数（消費支出に占める食費の割合）を利用した方法も試みられた。これは食費に関する計算をマーケット・バスケット方式で行って、これにエンゲル係数の逆数を掛けて最低所得の基準にする、というものである。最低限度のカロリー摂取に必要な食費には選択肢は狭いので恣意性も少ないと判断されたからである。しかし所得や生活慣行によってもエンゲル係数も変わる。どのエンゲル係数の値を採用するかでは恣意性が残ることになる。このような事情から「標準的な世帯の生活からあまり乖離しない程度の生活水準」といったような「相対論的な立場」で貧困線が設定されること

が多くなってきた。たとえば日本では一般勤労者との格差を縮小するような方式で生活保護の基準を考えてきた。またOECDでは加盟国の貧困を、当該国の人口の所得分布の中心数（メディアン）所得の低い順に人口を並べた時、ちょうど人口の半分にあたる人の持っている所得）の半分を貧困線に設定

している。この背景にあるのは人々の貧しさの意識が人と比べた相対的窮乏感にある、という考え方である。しかし「貧困線」所得の設定には決定的な方法はまだないようである。たとえば食費を見ると、一般的に食事の内容を改善すれば病気への予防にも労働能力の改善にもつながるので、「一定のカロリー摂取量以上であるか、どうか」という基準だけで食費を考えるのは視野が狭すぎる。また「生活基盤を安定にして経済的な衝撃から生活を守る」（生計の持続可能性）という視点から見れば「貯蓄（率）ゼロ」も貧困指標の一つであるから、貯蓄できる最低限度の所得も重要な貧困線の候補と考えられる。このように、食費から貯蓄、社会生活への参

#### 基本公式 貧困の要約指標

貧困率  $H = \frac{q}{n}$  ここでqは貧困線以下の所得(支出)しかない人口(または世帯)数、nは人口(世帯)数。

貧困ギャップ率  $I = \frac{z - \mu(p)}{z}$  ここでzは貧困線所得(支出)、 $\mu(p)$ は貧困層の平均所得(支出)。

表 『世界開発指標』の貧困指標

国名	貧困統計の調査年	貧困線1日1ドル		貧困線1日2ドル	
		1日1ドル以下人口比率 (%)	貧困ギャップ率 (%)	1日2ドル以下人口比率 (%)	貧困ギャップ率 (%)
ブラジル	2004	7.5	3.4	21.2	8.5
メキシコ	2004	3.0	1.4	11.6	4.2
インドネシア	2002	7.5	0.9	52.4	15.7
パングラデシュ	2000	41.3	10.3	84.0	38.3
パキスタン	2002	17.0	3.1	73.6	26.1
スリランカ	2002	5.6	0.8	41.6	11.9

(注)「貧困ギャップ率」は「1日1ドル」あるいは「1日2ドル」といった貧困線所得(支出)から貧困層の所得(支出)が平均してどのくらい不足しているかを、貧困線所得に対する比率で示したものである。スリランカ、メキシコ、インドネシア、パキスタン、パングラデシュは支出、ブラジルは所得がベースになっている(出所) World Bank [2007] *World Development indicators 2007*, Washington, D.C.:World Bank, pp.60-65.

加まで、貧困線の選択には幅があるので、「貧困」はいろいろな指標を組み合わせて分析しなくてはならないことを忘れるべきではない。

### ●貧困の要約指標

表には世界銀行の『世界開発指標』に掲載されている代表的な貧困指標を示したものである。この表の基になっている家計調査は所得あるいは支出がベースになっている。貧困層の状況を見るには「貧困の広がり」(貧困が人口にどのくらい波及

しているか)と「貧困の深刻さ」(どの程度深刻な貧困か)を把握しなくてはならない。貧困層の中には貧困線からわずかに所得が不足している人と極度に不足している人があるから、これらの情報を要約する貧困指標が必要である。「広がり」の情報は貧困線以下の所得しかない人の人口比率(headcount ratio)、貧困率と呼ばれる)でわかる。貧困の深刻さを見る指標では貧困層の所得が貧困線所得から不足する割合を平均した「(平均)貧困ギャップ率」が有名である。しかし、貧困率を下げることを政策目標にすれば、貧困線からの不足分が非常に大きい人より、不足分が小さい人に所得移転した方が、すくなく所得移転で貧困率を大きく削減できるので「費用効果的」とも言える。しかし貧困対策は「一番困っている人を一番最初に助ける」ことが本来の姿であるから、貧困率だけを政策目標にするのは正しくない。(平均)貧困ギャップ率に貧困者数を掛ければ貧困層の所得を貧困線にまで高めるのに必要な財政支出規模がわかるので有用だ

が、そこで重視されているのは貧困層の所得総額だけである。同じ所得でも貧困層の中で均等に分配されているのと、不平等に分配されているのでは貧困の深刻さも変わるので、(平均)貧困ギャップ率だけでも貧困層の状況はわからない。そこで、このような問題を是正した新しい貧困指標も提案されている。

### ●「生活の質」への視点

貧困線を考える時には所得そのものよりは、所得によって実現できる「生活の質」にも注目すべきである。たとえば病気や障害のある人は、そつでない人に比べて、一日1ドルでも、人間らしい生活はできないと思われる。「健康で文化的な最低限度の生活」ができるように、個人や世帯の属性や状況に応じて貧困線も調整することは、貧困の絶対論的な立場に立つ人にとっても重要であるはずである。良く行われるのは世帯規模の調整である。一般的に、家具や空調設備、電話などは、一人が使つても一台必要だが、一台あれば同居している家族も使えるので、消費活動には「規模の経済」(世帯規模による節約効果)が期待できる。このような側面に注目して、同値尺度という指標も利用されている。この連載でも紹介した「人間開発指数」や様々な社会指標(たとえば妊産婦死亡率や体重不足時の割合など)は「生活の質」を見るときという意味では重要な貧困指標になっている。

(のがみ ひろき/アジア経済研究所開発研究センター)

### ■参考文献

貧困指標の解説はSubramanian, S. [1997] "Introduction," in S. Subramanian ed. *Measurement of Inequality and Poverty*, Delhi: Oxford University Press, pp.1-53  
等を参照した。貧困の絶対論的立場と相対論的立場はSen, A. K. [1983] "Poor, Relatively Speaking," *Oxford Economic Papers*, Vol. 35, July, pp. 153-69, reprinted in S. Subramanian ed. *Measurement of Inequality and Poverty*, Delhi: Oxford University Press, pp.159-179が基本。日本を中心にした貧困線の変遷は岩田正美[二〇〇七]『現代の貧困』筑摩書房(ちくま新書)、高山憲之[一九八〇]『不平等の経済分析』東洋経済新報社等を参考にした。

# フィールドワーク 心得帖

## 階層社会ブラジルでのフィールド・ワーク

本稿は、自らの研究において現地でのフィールド・ワーク（以下FW）を重視する筆者の経験を、研究対象国であるブラジルを事例に紹介するものである。本稿ではFWの実施可能性、階層社会ブラジルでのポイント、FWの目的、現地主義と日本人であるフィールド・ワーカーという観点から、筆者が思う「心得」をまとめる。その際、時間（Time）・場所（Place）・場合（Occasion）の「TPO」に、ポルトガル語の階層（Class）の「C」および言語（Lingua）と話し方など（Linguagem）の「L」を加えた「TPOCL」を提示し話を進める。

### ★ブラジルでのFW実施可能性

まず一般的に言われるTPOのうち、ブラジルのFWで留意すべきなのが、Tの「時間」である。想像に難くないであろうが、ブラジルの時間は日本のそれと大きく異なる、いわゆる「ラテン時間」である。したがって、待ち合わせ時間に相手が現れず、計画通りにFWが実施できないこともしばしばある。最近では携帯電話が普及したため、約束時間に相手が現れない時も連絡を取ることができるが、現地の人の身に深く染み付いた習慣や交通事情などの影響は依然として強い。そのため、FWの実施可能性を高めるにはスケジュールに時間的な余裕を持たせ、同日にアポイントを多く入れないことが基本だといえる。またTPOのPである「場所」に関しては、治安問題というブラジルの事情を考慮に入れる

必要がある。つまり、これはTの「時間」とワン・セットなのだが、「行つてはいけない場所へ、行つてはいけない時間に行かない」という鉄則を意味する。残念ながら改善の兆しがなかなか見えないブラジルの治安問題に関し、過度に臆病ではフィールド・ワーカーとして何もできないが、上記の鉄則から逸脱した者は外国人やブラジル人といった分けなく「よそ者」として狙われる。したがって、ブラジルでFWの実施可能性を高めるためには、場所と時間、さらにはその時の服装や同行者に注意を払う必要がある。

### ★階層社会ブラジルでの

#### ポイント

ブラジルの人々は「陽気、おしゃべり、気さく」などのステレオ・タイプなイメージが多分に当たっている反面、経済だけ

でなく社会や文化などの要素により形成される「階層」（冒頭で述べたC）で明確に分かれている。つまりブラジルの社会とは、その人々に関するステレオ・タイプな一般的イメージとギャップのある、階層社会という側面を持っている。階層による意見や嗜好の違いはブラジルに限ったことではないが、同国では階層による生活空間の分断も含めそれらがより顕著であり、異なる階層の人間同士が日常で接する機会是非常に少ない。

したがって、このような階層社会の全体像を把握しようとするとFWでは、スラム街や住民組織の貧困層に入り込むこともあれば、研究者や政府高官の知識層にインタビューすることもある。また、中間層の消費動向を探ったり、富裕層の居住環境を調べたりすることもある。そのため調査の際には、TPOのOである「場合」に関し「階層」という配慮が必要となってくる。つまり、スラム街で貧困層の生活を調査する場合と高層ビル内で知識層と政治経済について話をする場合とは、当然ながら服装や振る舞いをもその場合と対象者の階層に適したものにすべきであり、そうしなければ

FWは上手いかわない。

さらにまた、服装や振る舞いより重要で、かつ階層と深く結びついたFWのポイントとして、「言葉」を挙げるができる。この言葉とは、まず外国人研究者にとつては現地の言語（Lingua）を意味し、それを上手に話せることは大きなアドバンテージとなる。しかしそれだけでなく、階層社会ブラジルでは話し方や言葉使（Linguagem）が階層により大きく異なるため、相手との直接かつ円滑なコミュニケーションを可能にするためには、外国語としての現地語だけでなく相手の階層に合わせた話し方や言葉使いも同様に重要となってくる。つまり「言葉」のLは、二重の意味でFWにとつてポイントなのである。

### ★フィールド・ワークの目的

次に、社会学をベースとした地域研究者という筆者の立場を前提に、ブラジルでの経験から提示した「TPOCL」がなぜ重要なのかを、FWの目的という観点から説明する。この目的とは「現地の有益な情報の入手や現実の把握」であり、その上位にある研究目的の「研究対象国・地域の社会構造の理解」を

専門分野：ブラジルおよびラテンアメリカの地域研究、都市社会学  
フィールド・ワークを基にブラジルの政治、経済、社会に関する研究を行うとともに、アジア  
経済研究所のホーム・ページに毎月「ブラジル・レポート」を掲載。



スラム街など治安の悪い場所へ行くこともある（アジア経済研究所撮影）



社会運動メンバーとのミーティング（アジア経済研究所撮影）

可能にするものだといえる。そしてこのFWの目的を達成するため、フィールド・ワーカーには相手との距離をできるだけ近くすることが求められる。では、どうしたら相手により近づくとができるのであろうか。

ブラジルには「Jogo de Cintura」という言葉がある。直訳すると「腰のゲーム」で、相手の腰の動きに合わせて自分の腰を動かすことであり、日本語では「臨機応変」、つまり「状況の変化に応じた柔軟性」を意味する。ブラジルに限らず相手との距離を縮めるには、このような柔軟性が必要であろう。またさらに階層社会ブラジルは、一見誰にでも陽気でフレンドリーに思われる人間関係の距離

が、実際には階層に大きな影響を受けている。したがって、階層を考慮した「Jogo de Cintura」ともいえるTPOCLは、フィールド・ワーカーにとって相手との距離を近づけ、FWの実施と目的達成を可能にする上でポイントだといえる。

### ★現地主義と日本人である

#### フィールド・ワーカー

本稿の最後に、フィールド・ワーカーに求められる現地主義、および日本人であるという事実から、FWの利点と留意点に関して私見を述べる。

まず前者の現地主義であるが、この実践によりフィールド・ワーカーは現地との距離を近づけることができるため、前述のFWの目的達成に有効だといえよう。この点に関して筆者は、本稿のTPOCLを心がけていることに加え、日系人が多いブラジルを研究対象とし、また顔立ちが若干日本人らしくないこともあり、現地主義と現地化を比較的实践できているのではと考えている。しかし、現在の状況は一朝一夕に築き得たものではない。現地主義にもとづきこの人々や社会と長く付き合うことが重要である。なぜなら、

時としてその国や人々に“疲れる”ことがあっても“飽きる”ことがなければ、調査研究を行う余地はまだまだ存在するからである。

また後者については、フィールド・ワーカーは「日本人であること」を前提に現地主義の実践に努めるべきだと考える。なぜなら、日本人（外国人）であることには利点があるからである。例えば、現地の研究者が気づかなかつたり、気づいていても階層に起因する偏見などから調査を実施していなかつたりする問題にも、我々は踏み込むことができる。また、特にブラジルの場合は日系人の方々のおかげもあり、「日本人であること」の信用は高く、このことは異国で一人FWを実施する上で大きなメリットとなる。このような状況にも関わらず、例えばラテン時間の多用など過度に現地化することは、現地での信用低下をもたらす結果としてFWに支障をきたすことにもなる。したがってFWにおいては、現地主義と日本人（外国人）であることの双方の利点を上手く活用することが大事だといえる。



現地大学生の協力のもと調査チームを結成し実施した高齢者調査（筆者撮影）

TPOCLに加え現地主義と日本人であることをもとにFWを行えば、求めていた情報だけでなく予期せぬそれ以上のものが入手できることがある。そしてこのことが、前述の点とともにFWの利点だといえよう。しかしFWの留意点として、我々が入手した有益な情報や把握した現地の現実とは、外国の研究者が構築する“現実”にとつて有益なものであり、現地の社会や人々の“現実”とは必ずしも一致しないという点を挙げることもできる。